

シュリー・ハヌマーンの知識の探求

『シヴァ・プラーナ』の物語より

遠い昔、キシキンダーの王国を取り囲む広大な古い森に、猿の顔と尾を持つ、高度に知的なヴァナラという一族が住んでいました。ヴァナラ族は、古典的教典、『ラーマーヤナ』で語られる壮大な戦いで、光の軍勢を助けるためにブラフマ神が生み出しました。シヴァ神は、この戦いにおいて重要な役割を果たすことが運命付けられたヴァナラ族で最も偉大な存在のシュリー・ハヌマーンとして、自ら地上に現れました。

ハヌマーンは、まだ小さな子どもだった頃に神々から強大な力を授かりました。シュリー・ハヌマーンは、彼の保護者である風の神、ヴァーユから、どこにでも移動することができる能力を受け取りました。創造の神、ブラフマからは、望む姿に変わることのできる能力を、そして世界を維持する神、ヴィシュヌからは、献身の贈り物を受け取りました。太陽の神であり知識の守護者であるスーリヤ・デーヴァターは、適切な時が来たらシュリー・ハヌマーンを教育すると約束しました。

シュリー・ハヌマーンは、神聖な存在だったのでとても早く成長し、子ども時代はあっという間に終わりました。母親のアンジャナーにとっては、ハヌマーンが赤ん坊だったのは一瞬で、次の瞬間にはすっかり成長し、象の群れのように強く、風のように素早くになっていたと思えました。

「ハヌマーンの教育はどうしましょうか」。アンジャナーは夫のケーサリに尋ねました。「彼はヴェーダや、これらの聖なる教典を支えるあらゆる科学を学ぶ必要があります。あっという間に大きくなったので、学校で学ぶ時間が全くありませんでした」

「確かに」と、ケーサリは同意しました。「ハヌマーンは、この時を超越した知識を自分のものにして初めて、自分の偉大な力を英知と見識をもって使う準備が整うだろう」

「でも、彼に教えてくれる人が見つかるでしょうか」

「毎日私たちを照らしてくださる存在以外には、考えられない」と、ケーサリは言い、さらに付け加えました。「覚えているか、スーリヤ・デーヴァターはハヌマーンを教えると申し出てくださった」

「スーリヤ神なら私たちの息子の素晴らしい先生になってくださるでしょう。でも、とても遠く離れています」と、アンジャナーは言いました。しかし、彼女は息子を彼自身の成長のために安全な家から出さなくてはならないことを知っていました。ですから、アンジャナーはこの新しい計画について話そうと彼の所へ行きました。

多くの場合はいたずら好きで活発なハヌマーンは、この時、川岸の大きな岩の上に座ってじっと考え事をしていました。

アンジャナーは言いました。「ハヌマーン、あなたのお父さんと私は、あなたが教育を受ける時期が来たと考えています。あなたの身体は成長しました。今度は聖なる教典を勉強することを通して、あなたのマインドを鍛錬する時が来たのです」

「お母さん、ありがとうございます」と、ハヌマーンは言いました。「私は教典の知識を熱望しています。誰が私の先生になるのですか」

「スーリヤ・デーヴァターです」と、アンジャナーはとても喜んで言いました。「彼は私たち皆の中にある光を表しています。スーリヤ神は、至高なる自己として知られる真理の光の象徴です。

明日、あなたは太陽の神の所へ行き、生徒として受け入れてくださるか、謹んでお願いしてみなさい」

「スーリヤ神と学べるのは心から光栄なことです」と、ハヌマーンは言って、スーリヤ・デーヴァターがちょうど空を鮮やかな色合いの赤、オレンジ色、金色に染めている西の地平線の上を見ました。「でも、一体どうしたら彼の所へ行けるのでしょうか」

アンジャンナーはほほ笑みました。「愛しいハヌマーン、あなたは自分が本当は誰なのかを忘れてしまったのですか」と、ハヌマーンの両肩に手を置いて、彼女は言いました。「あなたは聖なる存在です。あなたは神々に祝福されています。あなたは風の速さと、自由に姿を変える力を持っています。自分自身を信じれば、ハヌマーン、あなたは何でも成し遂げられます」

シュリー・ハヌマーンはうなずいて、両手を合わせながら、燦然(さんぜん)と沈んでいく太陽に頭を垂れました。

次の朝、そのヴァナラの若者は天上の師の所へ行って学び始めたくてたまらず、夜明け前に起きました。シュリー・ハヌマーンは外の静かな大気の中へ出て、かすかな光が地平線を照らす、東の方を向きました。スーリヤ・デーヴァターの所に行くという意図を定め、深く息を吸って、ハヌマーンは森の中で一番高い木よりも高くその姿を変え、そして空へと跳躍しました。

シュリー・ハヌマーンは、夜明け前の空に輝く彗星(すいせい)のように、想像を超えた速さで飛びました。地球が背後に遠ざかる中で、彼はちらりと後ろを見て、驚きに息をのみました。地球は、限りない空の闇の中で、輝く青い宝石のように見えました。

シュリー・ハヌマーンは自分のゴールに向き直りました。そして、たちまち壮大なスーリヤ神の面前に着きました。

スーリヤ・デーヴァターは、壮麗な光の二輪馬車に乗って天上を旅していました。この素晴らしい乗り物は何千もの輝く宝石がちりばめられ、7頭の白い馬によって引かれていました。これらの壮大な馬が天空を疾走すると、そのたてがみからは閃光(せんこう)がきらめき、あらゆる方向に虹を放っていました。それでもなお、スーリヤ・デーヴァターの顔は目もくらむばかりに輝いていたので、それに比べれば彼の周りの多くの光はかすんで見えました。

うっとりとして畏怖の念に打たれ、シュリー・ハヌマーンはその馬車と並んで飛べるように、スーリヤ神の動きに同調しました。

「光の神、知識の守護者、自ら輝く方よ、ごあいさつ申し上げます」と、ハヌマーンは胸の前で手を合わせ、頭を垂れながら言いました。「どうか私を生徒として受け入れ、あなたの聖なる英知で私の魂を照らしてください」

スーリヤ・デーヴァターは言いました。「ハヌマーン、おまえに再び会えて嬉しい。前回会った時よりも、おまえはその品位と速さにおいて成長している。喜んでおまえを生徒として受け入れよう」。彼はつかの間思案しました。「しかし、どうやっておまえを教えることができるのだろうか。見ての通り、私は決して止まらない。私は、生命を与える光を放出するために天上を常に動き回らなければならない。決して一つの所にとどまることはできないのだ」

「神よ、天上を永遠に動き続けることがあなたのダルマであることを、私は理解しています。そして、私は常にあなたの生命を与える光に感謝します。もし私を教えることに同意してくださるなら、私はあなたと共に空を動き続け、あなたが発する貴重な言葉のすべてを聞き取ります」

スーリヤ神は、ほほ笑んで言いました。「おまえは素晴らしい熱意を持っている。そして、それは教典を学ぶ生徒として重要なことだ。しかし、もしヴェーダの神聖なマントラを学びたいのならば、教えを授ける存在に常に向き合っている必要がある」

「では、私は後ろ向きに動きます」と、シュリー・ハヌマーンは言い、馬車の前に矢のように飛んでいき、振り向いて師に顔を向けました。ハヌマーンは続けて言いました。「私はあなたの輝かしい顔の、常に目の前にいるようにします」

スーリヤ神はハヌマーンの専心と熱意に感嘆して言いました。「よろしい、では、始めようではないか」

スーリヤ・デーヴァターは四つの神聖なヴェーダ全体を六つの解説の教典と共に朗唱しました。来る日も来る日も、後ろ向きで師の目を見つめながら地球を回り、シュリー・ハヌマーンは貴重な言葉一つ一つを彼自身に浸み込ませました。スーリヤ・デーヴァターのまばゆく輝く光以外は彼の眼中になく、それは彼に浸透し、彼の存在を隅々まで育みました。ヴェーダの黄金の詩節とマントラは、真理の花々のように、その生徒の中で開花しました。

スーリヤ・デーヴァターは朗唱を終えると、生徒に学んだことを繰り返すように求めました。シュリー・ハヌマーンは、四つのヴェーダと六つのシャーストラのすべてのマントラ、すべての詩節を完璧に朗唱しました。一度聞いただけで、彼はすべて記憶したのです。

「おまえは注意深く聞き取った」と、スーリヤ・デーヴァターは生徒に言いました。「おまえは私のすべての言葉を吸収したのだ」

彼は少し黙りました。「これを知っていなさい、ハヌマーン。おまえはこの英知をずっと自分の中に持っていた。私が与えたものは、おまえ自身の英知への扉を開ける鍵の役目を果たした。

これからは、おまえはその英知をいつでも手に入れることができる。もう自分の家に帰り、学んだことすべてを熟考する時だ」

感謝の念でいっぱいになり、シュリー・ハヌマーンは胸の前で手を合わせて師に深く頭を下げました。「スーリヤ神よ、あなたが光を放つ顔を輝かせる所にはどこでも日の光をもたらすように、あなたは私の心とマインドを大いなる自己の知識の光で満たしました。ここを去る今、私はこの感謝を表して何をささげることができるでしょうか」

「おまえの感謝の言葉をありがたく思う」と、スーリヤ・デーヴァターはほほ笑んで言いました。「おまえの確固とした意志と献身は、おまえを教えた私へのほうびであった」

シュリー・ハヌマーンは再び頭を下げ、それでもさらに言いました。「神よ、私がおまえへのささげものを願うのは、あなたのためではありません。あなたは必要なものなどないことを、私は知っています。私は自分のために願うのです。あなたが私に下さったものはあまりに貴重で、私は返礼に何かをおまえにささげずにはいられないのです」

彼の生徒に再び喜び、スーリヤ神は思いやりを持って彼を見ました。「ハヌマーン、では、おまえに一つ願おう」

「どうぞ、スーリヤ神よ」と、ハヌマーンは言い、聞こうとする熱意で近くに寄りました。「どうぞ、私に何が出来るかを教えてください」

「私の息子であるヴァナラ族のスグリーヴァ王子の元に行きなさい。彼に従い、相談役になりなさい。おまえのこの奉仕を、私は大いに喜ばしく思うだろう」

シュリー・ハヌマーンの目は感謝の涙であふれました。「私は心を込めてスグリーヴァ王子に仕えます。あの方に仕えることがあなたの願いをかなえることだと、私は分かります。ありがとうございます、神よ」

シュリー・ハヌマーンは再びお辞儀をし、そして旋回して光のごとく素早く飛び、輝く青い惑星である地球に戻りました。そうしてスグリーヴァ王子の元への彼の旅は始まり、それはやがて彼をラーマ神との対面へと、そして彼の高潔な運命をかなえることへと導くのです。



『シュリー・シヴァ・プラーナ』は、インドで崇敬されている教典の一つであり、神聖な物語、哲学的教え、賛歌、有徳の人生を生きる方法についての導きなどの、壮大な大綱です。最も初期の版は西暦6世紀頃に編さん、記録されたものと考えられていますが、その物語自体は数千年も前に起きたと見なされる出来事を描いています。

改作: Rashmi Smith

挿画: Michelle Fridkin

デザインレイアウト: Jaime A. Castaneda

© 2018 SYDA Foundation®. 著作権所有。